

企画展 奈良県立美術館所蔵名品展

奈良県美から始める展覧会遊覧

主催・会場 奈良県立美術館

令和4年2月5日(土)～3月27日(日)

※会期中展示替えあり



奈良県美 から始める 展覧会遊覧

展覧会の趣旨

奈良県立美術館は昭和44年(1969)に京都市在住の日本画家・風俗史研究者である吉川観方氏よりコレクションの一部を奈良県に寄贈したい旨の申し出があり、コレクションを後世に伝えるべく保存と展示のための施設準備が計られたことが創立のきっかけとなります。4年後の昭和48年(1973)に開館し、同年3月に初の展覧会「富本憲吉展」を開催しました。昭和53年(1978)には化学博士の大橋嘉一氏より現代美術の寄贈を受け、さらに昭和55年(1980)には、元東京教育大学教授の由良哲次氏の寄贈品を紹介する美術館増築記念特別展「由良コレクション展」を開催しました。

当館は篤志家から数々の寄贈を受け、鎌倉時代から現代までの日本美術を中心に収集し、また、富本憲吉や田中一光など奈良出身の芸術家を紹介する展覧会を企画してまいりました。「奈良」という地域に軸足を置いた、美術品の収集と展示活動は、当館の基本方針として開館以来現在まで変わりません。

本展では、日本の書画、洋画、彫刻、陶磁器、染織品、刀剣甲冑、浮世絵、ポスターデザインなど極めて多様な奈良県立美術館のコレクションを「寄贈者の好み」と「奈良ゆかりの美術」という2テーマを立てて展示し、作品の魅力、そして奈良県立美術館の存在をより多くの方々に再発信いたします。

出品点数 (おおよそ)

- ・吉川観方コレクション60点
- ・富本憲吉作品、奈良ゆかりの工芸作品20点
- ・大橋嘉一コレクション20点
- ・奈良ゆかりの絵画、彫刻作品35点
- ・由良哲次コレクションなど35点

展示概要

吉川観方コレクション

吉川観方は明治から昭和期にかけて活躍した日本画家です。奈良との関わりとして、昭和29年(1954)に春日大社の絵師職(春日絵所)を務めたことが知られます。昭和47年(1972)と昭和54年(1979)の二度に分けて、自身の画業と風俗史研究のために集めた資料の一部を奈良県立美術館に寄贈しました。コレクションは鎌倉時代の仏画から大正時代の日本画まで様々で、吉川観方は有職故実に見える公家の文化や江戸・京都の人々に愛された浮世絵に至るまで日本文化に幅広い関心を持っていたことが窺えます。

奈良ゆかりの工芸 彫刻作品

奈良県立美術館は奈良にゆかりのある美術工芸家の作品を数多く収蔵しています。なかでも奈良県安堵町出身の富本憲吉に関して、開館以来継続して創作活動を追ってきました。2021年夏の特別展「ウィリアム・モリス」の開催は、富本の学生時代の関心事に由来します。

奈良には世界に誇る美術工芸保管施設があります。聖武天皇遺愛の品々を保存した正倉院です。近代以降にも優れた美術工芸家によって、正倉院宝物は復元、模刻されてきました。本展で作品展示する北村大通・昭齋父子は奈良を代表する漆芸家であり、正倉院宝物の模造を手がけたことが知られています。

大橋嘉一コレクション

大橋嘉一は関西で活躍した実業家・化学者で、1950年代から70年代初めにかけての日本の美術界をサポートした、パトロンでありコレクターです。そのコレクションは全体でおおよそ2000点にのぼり、奈良県立美術館のほか大阪の国立国際美術館、京都工芸繊維大学に分蔵されています。大橋コレクションは彼自身の審美眼と美術への愛情に依る収集品と言え、戦後美術史を紡ぐ資料的な意義だけでなく、ポストコロナのアートシーンを考える上でも、注目すべき作品群と言えます。

奈良ゆかりの絵画

奈良県立美術館では2017年に戦後、正強高校理事長・校長を務めた不染鉄の回顧展を開催、2018年に開催した「美の新風」展では、大正時代に奈良市高畑町に住んだ洋画家たちを紹介し、2019年には奈良の社寺をモチーフにした版画を制作した「ヨルク・シュマイサー」の展覧会、2020年には奈良出身の昭和を代表するデザイナーである「田中一光」展を開催しまし

2021年度奈良県立美術館企画展プレスリリース

由良哲次コレクション ほか	<p>た。</p> <p>当館は開館以来、「奈良」ゆかりの美術家を紹介する展覧会を開催しています。本展では、これらの展覧会のご縁によってご寄贈頂いた作品を含め、「奈良」を描き、「奈良」を愛した美術家の作品を展覧・紹介いたします。</p> <p>由良哲次は現在の奈良市柳生町に生まれた哲学博士です。戦前は東京高等師範学校で教鞭を執り、戦後は歴史、哲学の研究の傍ら、日本美術、特に水墨画(雪舟と拙宗の関係)と浮世絵(東洲斎写楽とは誰か)を研究しました。由良哲次のコレクションは昭和53年(1978)に奈良県立美術館に寄贈され、曾我蕭白「美人図」は奇怪な表現で人気を集める蕭白の作品のなかでも一、二を争う優品として知られています。</p> <p>また、本展では、明治時代から昭和初期にかけて「大和」の文化を研究した水木要太郎(元奈良女子大学教授)や戦中戦後に官僚、参院議員として活躍し、剣道の普及に尽力した木村篤太郎(五條市出身)といった大和ゆかりの文化人のコレクションも展示します。</p>
主催・会場	<p>奈良県立美術館 〒630-8213 奈良県奈良市登大路町10-6 TEL 0742-23-3968/FAX 0742-22-7032/ テレフォンサービス0742-23-1700 公式ホームページ http://www.pref.nara.jp/11842.htm ツイッターアカウント @ArtmuseumN フェイスブック @narakenmuseum</p>
会期・開館時間	<p>2022年2月5日(土)～2022年3月27日(日) 9時～17時(入館は閉館の30分前まで) 毎週月曜日は休館日(3月7日、14日、21日は開館) [前期展示]2月5日(土)～2月27日(日) [後期展示]3月1日(火)～3月27日(日)</p>
観覧料	<p>一般400円、大学生・高校生250円、中学生・小学生150円 *新型コロナウイルス感染症拡大防止のため団体料金の設定はございません。 *次の方は無料でご観覧いただけます。 ・65歳以上の方、身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者福祉手帳をお持ちの方と介助の方1名 ・外国人観光客(長期滞在者・留学生を含む)と付添の観光ボランティアガイドの方 ・教職員に引率された奈良県内の小中高校及びこれに準ずる学校の児童・生徒 ・毎週土曜日は県内外問わず、小中高生及びこれに準ずる学校の児童・生徒</p>
後援	NHK奈良放送局、奈良テレビ放送株式会社、株式会社奈良新聞社、西日本旅客鉄道株式会社

2021年度奈良県立美術館企画展プレスリリース

	<p>社、近畿日本鉄道株式会社、阪神電気鉄道株式会社、奈良交通株式会社、奈良県商工会議所連合会、奈良県商工会連合会、奈良県中小企業団体中央会、株式会社南都銀行、(一社)日本旅行業協会、(一社)全国旅行業協会奈良県支部、(一社)国際観光日本レストラン協会、(一財)奈良県ビジターズビューロー、(公社)奈良市観光協会、奈良県旅館・ホテル生活衛生同業組合</p> <p><予定></p>
会期中のイベント	<p>★奈良県立美術館の対話型鑑賞会 ファシリテーター：春日美由紀氏(京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター研究員)、京都芸術大学アートプロデュース学科学生 日時：3月20日(日)10:00～11:30(中学生以下を対象) 3月20日(日)13:30～15:00(高校生以上を対象)</p> <p>☆美術講座 講師：三浦敬任(当館学芸員) 日時：2月27日(日)14:00～</p> <p>☆学芸員による展示ガイド 2月12日、3月19日(いずれも土曜日)14:00～</p> <p>・展示解説を書いてみよう！@展示室(仮) 展示室に掲示板を設け、気に入った作品の見所や鑑賞の前提となる知識を観覧者同士で共有しあう企画。</p>
同時開催	<p>当館ギャラリー 観覧無料 NPO法人文化創造アルカによる連携展示 「発見！奈良きたまち-重ねるまなざし-」 協力：国立大学法人奈良教育大学附属中学校、奈良町・大学間連携協議体</p>
連絡先	<p>奈良県立美術館 〒630-8213 奈良県奈良市登大路町10-6 tel:0742-23-3968/fax:0742-22-7032 展覧会企画担当 三浦敬任</p>

2021年度奈良県立美術館企画展プレスリリース

■広報用画像(ご希望の画像の番号をお知らせ下さい。)

*キャプションは正しくご掲載下さい。掲載にあたりトリミングについては応相談。

<p>[図版1] 「伝淀殿画像」 1幅、桃山～江戸時代初期、 絹本着色 72.5×36.3cm <観方コレクション></p>		<p>県立美術館の作品の中で、最も問い合わせが多い作品。纏紵縁の畳の上に座す、紫地に段模様の縫箔を施した豪華絢爛な打掛を纏う女性像。軸裏の墨書「田村たゞ頼め」の「たゞ」を「秀」、「め」を「母」とする誤字説から「秀頼母」の淀殿の姿を描いたものと言われてきた。上部には「ただたのめしめじがはらのさしもぐさ我世の中にあらむかぎりは」という謡曲『田村』でシテが語る和歌が示されており、軸裏墨書はこの和歌に対応すると言われる。</p> <p>像主が淀殿であるか断定はできないが、狩野派風絵画表現から桃山時代末期ごろの高貴な女性を描いた作品に間違いない。</p>
<p>[図版2] 菱川師房 「見返り美人図」 1幅、江戸時代(17世紀末ごろ)、絹本着色、83.2×30.8cm <観方コレクション></p>		<p>本図は、左手で着物の襟をとり、素足で歩みを進めながら振り返る女性像を描く。着物は薄紅地に色紙型を散らす模様で、色紙型の中には伊勢物語の物語絵や、雲に亀甲繫ぎ模様を描き出す。直後の18世紀初頭に活躍する懐月堂派の美人画と比較すると、色彩や女性の姿形は抑制された優美さを表現しているように見える。</p> <p>作者の菱川師房は、浮世絵の祖と言われる菱川師宣(?-1694)の息で、絵師として活躍したのちは家業の紺屋を継いだと伝えられている。</p>

<p>[図版3] 伝雪舟 「秋冬山水図屏風」 6曲1隻、室町時代、紙本墨 画淡彩 151.9×340.2cm <由良コレクション></p>		<p>水墨で秋冬の山水風景を描いた屏風。一雙で四季を表す左隻分と考えられ、これまで米国・フリア美術館所蔵の「山水図屏風」を右隻にあてる説が呈された。本図5, 6扇の冬の山並みと合間の山居は、伝夏珪「山水図」(台北・故宫博物院)や伝周文「雪景山水図」(東京国立博物館)に類似しており、岩山を折り重なるように描く表現は、李唐風である。雪舟の真筆であるか検討の余地があるものの、雪舟周辺の中国水墨表現の規範や表現学習の跡が見える作品として貴重である。</p>
<p>[図版4] 曾我蕭白 「美人図」 1幅、江戸時代(18世紀後 期)、絹本着色 107.6×39.4cm <由良コレクション></p>		<p>由良コレクション中の優品の一。筆者は江戸時代後期の奇怪な画風で知られる、現在も人気の高い曾我蕭白。顔面や着衣に白や橙、薄青や薄桃の濃彩を施しており、内衣の赤色のグラデーションは見事である。蕭白の優れた彩色技法が見える唯一の作品。</p> <p>手紙を破る女性像、着衣や帯が中国風の山水と龍の意匠であることや、背景に墨蘭が描かれることなどから様々な解釈がなされており、『楚辞』『離騷』の作者屈原との関わりを想定する説もある。</p>

2021年度奈良県立美術館企画展プレスリリース

<p>[図版5] 富本憲吉 「赤地金銀彩羊歯模様蓋付飾壺」 一口、昭和28年(1953)、磁器、高18.0.6cm径22.0cm <奈良ゆかりの美術家></p>		<p>富本憲吉を代表する羊歯模様を蓋と壺に連続させる作品。 この羊歯模様は四つの羊歯の葉を直角に交差させ菱形におさめたパターンであり、富本自身「色絵、赤地金銀彩に最適である」(『富本憲吉模様選集』1957年)と述べる。 本作はもとは在米日本大使館に飾られていた作品で、金銀彩羊歯模様の作品としては最初期の作品と言える。</p>
<p>[図版6] 白髪一雄 「十界の内、天・人間界」 1面、昭和49年(1974)、アルキド樹脂塗料・キャンバス、71.0×60.0cm <大橋コレクション></p>		<p>1948年に京都市立絵画専門学校の日本画科を卒業し、すぐに洋画に転向。大阪市立美術研究所で学び、1955年に吉原治良が企画した具体美術協会へ参加した。ここで素足で絵の具を塗りつけるフットペインティングという手法を研究する。フランスのミシェル・タピエによって具体美術協会が紹介され、白髪一雄は欧米にて高く評価されるようになった。 公益財団法人尼崎市文化振興財団の白髪一雄記念室には大橋と白髪の手紙が残っており、新進気鋭の芸術家と美術を愛したパトロンとの関係がうかがえる。</p>
<p>[図版7] 浜田葆光 「水辺の鹿」 1面、昭和7年(1932)、油彩・キャンバス 139.3×193.9cm <奈良ゆかりの画家></p>		<p>浜田葆光は中央画壇にて、フェウザン会の結成に関わり、二科会で活躍したのち、大正5年(1916)に奈良に移り住んだ。浜田に続いて、山岳画家の足立源一郎や作家志賀直哉が高畑町に移り住み、大正時代には奈良を訪れる文化人が集うサロンが形成された。 本図は葆光が渡欧から帰国した後の作品で、奈良公園の風景や鹿を題材にした代表作。</p>

2021年度奈良県立美術館企画展プレスリリース

<p>[図版8] 「菊水文様 小袖」 一領、江戸時代(17世紀)、 白紬地・絞・染、丈156.0c m、裾66.0cm <観方コレクション></p>		<p>江戸時代前期の寛文年間(1661-73)には、本作品のように右肩背面を起点に左肩と右裾へと文様を展開し、左腰に大きく空間を残す構図の「寛文小袖」というスタイルが流行した。</p> <p>本作品は紬地に藍の鹿子絞りで流水を表し、流れに沿って菊文様が藍と紅で染め出される。現在は紅の赤色が褪色し、落ち着いた印象を受けるが、製作当時は大胆な構図と相まって華やかな印象の小袖と想像できる。</p>
<p>[図版9] 明 誉古礪(かんは「石」に「間」)《七福神図》 一幅、江戸時代(18世紀)、 紙本墨画、31.6×63.0cm <水木十五堂旧蔵品></p>		<p>七福神を描いたためでたい図柄の作品。画面中央には幣を手にし、右足を上げる踊る様子の寿老人を配し、それを取り囲むように左から恵比寿、大黒天、布袋、福祿寿、弁財天、毘沙門天が描かれる。描かれる七福神は楽しげに笑みを浮かべており、微笑ましい雰囲気が特徴である。</p> <p>筆者の明誉古礪は江戸時代前期に京都・奈良で活躍した画僧で、晩年は薬師寺で過ごし、仏画、社寺縁起絵、浄土宗版本挿絵などを手がけたことが知られる。</p>